

山上の説教から学ぶ (36) : 「黄金律」から学ぶ

メッセージノート (2021. 10. 24)

マタイ 7:12 だから、人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。これこそ律法と預言者である。(新共同訳)

■ 「黄金律 (ゴールデン・ルール)」意味

- ・ 卓越性 : 「人の嫌がること (迷惑になるようなこと) はしない」という教えは、日本ばかりでなく他の多くの文化圏でも見受けられるが、イエスのこの積極的の教えは、他に類を見ないもの。相手にとって一番良いこと (最善) を願って行動することである。
- ・ 実践の要求 : ただ、キリスト教には、こんな卓越したメッセージがあるからといって、それでこの教えを実行できるものではない。私たちは、一日の間、ほとんど自分のことしか考えておらず、人のことへの関心は薄い。そんな私たちに、イエスは、単にキリスト教倫理の高さを語っているのではなく、実行を促す。
- ・ 「だから」から始まる黄金律は、これまでのメッセージをまとめるとともに、実践へと行動を取らせる内容としてイエスは語っておられる。
- ・ 流れ : これまでのメッセージをまとめると、自分の本当の姿と直面させられ絶望し、自らの心の貧しさを自覚させられた者は、そこで、優しく待っておられる主に出会う。この恵みの主によって立ち上がらせていただいた者にしてはじめて (それは一回のみならず、継続的支えであるが)、この黄金律は実行できる。
- ・ 動機 : なぜなら、黄金律とは、私が本当にしてもらいたかったことを神がしてくださった経験を、今度は、私が人にするものだからだ。先週は、祈った祈りが聞かれなくてよかったという話をしたが、神の行動の動機は、いつも愛であり、私の最善を願って行動されたように、私も誰かのために行動するのだ。
- ・ 神の愛 : 「律法と預言者」とは、旧約聖書のことで、(旧約) 聖書を一言でまとめると、人への思いやり、愛であるイエスという。旧約聖書は、機械的で、何か冷たく感じられるという人がいるが、決してそうではない (マタイ 22:34-40 「律法の精神は愛」)。聖書は、一貫して神の愛を示している

■ 適用のないメッセージは語らないイエス

- ・ 「山上の説教」は、いよいよ最後のまとめ (適用) に入る。4つの違った例をあげつつ、実践を強調する。
- ・ イエスのメッセージは、いつも実践することを意図したものである。ただ、頭で知ることだけでなく、実践することをイエスは、求めている。そして、それができると思っておられる。
- ・ その最終目的は、人が変えられること (人生が変わること) である。私たちは、どうだろうか? 神に信頼を置くことを通して、人生は変えられてきているだろうか?

■ ほんとうに「人にしてもらいたいと思うこと」

- ・ クリスマンとしての成熟は、人に対する姿勢に現れる。自己中心な人間が、どこまでイエスの心を持つようになるのかということに尽きる。

ガラテヤ 5:14 律法の全体は、「自分を愛するように他の人を愛しなさい」(レビ 19:18) という一つの命令に要約されるからです。

- ・ しかし、どうしたら自分勝手な私たちが、人に優しく、また人の気持ちに寄り添えるようになるのか?

マルコ 12:29-31²⁹ 「『イスラエルよ、聞け。主なる神こそ、ただひとりの神です。³⁰心を尽くし、たましいを尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの主を愛しなさい。』これが最も重要な戒めです。³¹第二は、『自分を愛するよ

うに、あなたの隣人を愛しなさい』という戒めです。これ以上に重要な戒めはありません。」(LB)

- ・ ゴールは、隣人愛であると言ったが、そこに至るには、順番がある。それは、これまで「山上の説教」で見してきたように、全てのこと（関係）は、神との関係からスタートするということである。神との関係が正しい関係になる時、自分との関係、そして、他者との関係も回復していく。
- ・ これまでの人生の中で、絶体絶命の大ピンチにおいて、神の奇跡を経験したことはないか？そこでどんな神についての、また、人生についての真理を学んできただろうか？実際、人生の危機を通して学んだことが、あなたの人間性というものを形成してきた。あなたが人生の苦難を通して学んできた神からのメッセージは、どんなことになるだろう。

■ 本当の思いやり：パウロの場合

- ・ ピレモンとオネシモに対するパウロの思いやり（ピレモンへの手紙）

ピレモンへの手紙¹⁰ どうか、私が獄中で神に導いたオネシモを、愛の心でやさしく迎えてやってください。¹¹ オネシモ（「役に立つ」という意）は、以前あなたのもとにいたころは、役立たずの奴隷であったかもしれませんが。しかし、クリスチャンとなった今、あなたにとっても私にとっても、その名のおり役立つ者となりました。¹² そのオネシモを、私の心といっしょにそちらへ帰します。¹³ 内心私は、福音のために捕らわれの身となっている間、彼をそばにおいて、あなたの代わりに世話をしてもらいたいと思っていました。¹⁴ しかし、あなたの同意なしに、そんなことはしたくなかったのです。あなたがしてくれる親切はむりじいされてではなく、心から喜んでするものでなければなりませんから。¹⁵ オネシモが、しばらくのあいだ逃亡していたのは、彼が永久にあなたのそばにいる者となるためだったのでしょうか。¹⁶ それも奴隷としてではなく、はるかにまさった者、つまり、愛する兄弟（信仰を同じくする者）としてです。そのことでは、あなたの感慨もひとしおでしょう。単なる奴隷と主人の関係を超えて、キリストを信じる兄弟同士になったのですから。¹⁷ ですから、もしほんとうに私を友とってくれるなら、私を迎えるように、オネシモを、心から迎えてやってください。¹⁸ もし彼が、何か損害をかけたり、物を盗み出していたりしたら、その請求は私にしてください。¹⁹ 私が支払います。その保証として、自筆でこの箇所をしたためています。

- パウロは、ここで自分にしてもらいたいと思うこと（神の御心）をピレモンとオネシモにしたと思われるが、パウロは、この思いやりをどこで学んだのだろうか？
- ・ バルナバからしてもらった体験が大きかったと思われるが---エルサレム教会での受け入れ（使徒 9:26-28）やアンテオケ教会での働きへの招待（使徒 11:22-26）--- パウロは、エルサレム教会に向かう前に、実は、3年間、荒野で神との二人だけの時間を過ごしていた（ガラテヤ 1:11-18）。その経験が、基礎にあった。

ガラテヤ 1:16-18 この体験の後、私はすぐだれかに相談するようなことはしませんでした。¹⁷ また、以前から使徒に任命されていた人々の意見を聞くために、エルサレムに上ろうともしませんでした。アラビヤの荒野に行き、それからダマスコの町に戻ったのです。¹⁸ ペテロに会うためにエルサレムを訪問したのは三年後のことで、

- ・ パウロは、荒野で何を学んだのか？この荒野の経験というのは、クリスチャンが用いられるためには、通らされるものだが（モーセ、ヨセフ、ダビデ、エリヤなど）、彼らが通った共通の経験がある。それは、これまで誇りにして来たものが剥がされ、神への信仰だけにさせられることである。
- パウロの経験は、ピリピ3章に記されているが、キリストを知る素晴らしさ故に、これまで学んできた学問や達成して来たものが「ちりあくた」に思えるようになったという。

ピリピ 3:7⁷ しかし私は、以前、非常に価値があると思っていたこれらのものを、今ではことごとく捨ててしまいました。それは、ただキリストだけを信頼し、キリストだけに望みをかけるためです。

- あなたは、これまでの人生でどんな教訓を学び、それを誰に対して実践するのか？